

チャールズ・W・ロイド (編) 『人間再生産と性行動』

Charles W. Lloyd (ed.), *Human Reproduction and Sexual Behavior*,
Lea & Febiger, Philadelphia, 1964, cciii + 564 pp.

科学がそれぞれの専門分野において研究の深さを加えていくと、勢い各部門間の連絡がとぎれ、お互いの谷間を埋める橋渡しの知識が必要となる。最近、領域の異なる専門家たちが集って、共通のテーマについて各章を分担し、総合的に多角的に問題をとらえる形式の著書が増えているのは、そのせいであろう。

この本もそういった種類のもので、Worcester Foundation for Experimental Biology のロイドが編集し、彼を含む産婦人科、小児科、比較解剖学、発生学、生化学、内分泌学、精神身体医学、動物学、心理学、法律学の専門家16名が、人間の生殖生理学と性科学の関係について分担執筆している。

全29章のすべてにわたって紹介するには紙面が許さないが、(1)~(2)章、視床下部、間脳、下垂体等中枢神経系の生理学、(3)~(8)章、男女性器の生理学および性周期、受胎、出産、哺乳のメカニズム、(9)~(20)章、ステロイド研究の発達、ホルモンと性成熟、月経、(21)~(22)章、不妊、受胎調節、(23)~(24)章、哺乳類と人間の生殖行動、(25)~(26)章、性反応と不適合、(27)~(28)章、性問題と性異常、(29)章、性と法律といったように、扱う部門は多岐に亘っている。

一言に要約すれば、これは大変便利な本である。題名の分野における up to date な知見がぎわめて要領よく網羅され、言及されている。たとえば第25章および26章は、Washington 大学の W. H. Masters 博士および V. E. Johnson 女史の執筆によるものだが、2年後に単行本として出版された彼等の労作“Human Sexual Response” 1966 の簡便なダイジェスト版として、男女694名の観察結果の記録ばかりでなく、sex flush や sweating phenomenon の意味が理解できるし、またその応用篇として impotence や frigidity の改善にも適切な助言が得られる。G. W. Corner (Carnegie 研究所) が序文でこの本を「性と生殖の機能的要素のすべてについて今日知られている事柄を一冊に集約した本」として推薦していることも、あながち過褒ではない。

第2に、生殖生理学、とくにステロイド系ホルモンの臨床効果が、写真入りで具体的かつ症状別に提示され、最近のホルモン学の発達がよくまとめられている。記述も平易で、専門家ばかりか、関連領域を覗いて専門分野の知識を上げようとする人口資質研究者、体質学者、遺伝学者等に有益だろう。かつて Edgar Allen の編集した“Sex and Internal Secretions” 1932 は、当時、ホルモン学発展初期段階の実験室的知識として役立ったが、この本はそれより20年後、臨床、実用に役立つ内分泌知識を加えるに効果がある。

しかし反面、簡便すぎて物足りないうらみがある。編者ロイドが内分泌学者であるためか、ホルモン療法の紹介に偏しすぎたきらいが眼につく。その方面に分量を削くのはいいが、ホルモンが体格や心理や成熟にどう影響するかを解説するばかりでなく、かんじんのホルモンと behaviorism ないし ecology との関係がはっきりしない不満が残る。各専門家の各章分担という形式の、逆の反面である本質的欠陥がここに現われている。

第22章の受胎調節のところで、I.U.D. や経口避妊薬ばかりでなく、男性用避妊薬までふれている手まわしの良さは多とするが、百科辞典式知識に終わり、再生産や社会生活との関連がはっきりとしない。法律を扱う第29章でも、法学者の立場で、墮胎や人工授精や姦通の判例を紹介するに止まり、優生学や心理学の領域にはほど遠い。自然科学と社会科学の谷間は依然そのままに残る。この境界領域を埋める工夫が知りたいところである。

なお、この本の興味も不満も case-study に重点をおくところにあり、demographer の立場から、たとえば Raymond Pearl, “The Natural History of Population” 1939 における統計資料や統計処理法の近代版を期待すれば、失望に終わることを付記しておく。

(青木 尚雄)